

同会は本校と非常に密接な関係があったため、東京芸術大学美術学部には同会に関する左記文書が残っている。

明治三十七年以降編纂関係書類	同	同	同
明治四十四年ヨリ庶務書類	同	同	同
支部書類	同	同	同
明治四十四年四月再調会員宿所録	同	同	同

なお、同会については外に次のような参考資料ないし研究書がある。

- 『図画教育』第一号〜第二十一号（明治三十六年〜同四十五年）東京芸術大学附属図書館蔵（第八号、第十八号欠）
- 『随想録』岩田僊太郎著（昭和六年）
- 「続・日本の近代美術教育史」三〜六。金子一夫著。『美育文化』第二十七卷第八号〜十一号（昭和五十二年。美育文化協会編集部）

⑧ 日光修学旅行

本年十月の日光修学旅行（222頁参照）は愉快的旅行であつたらしい。『東京美術学校校友会月報』第二卷第二号の「日光はがきだよ」に寄せられた各科学徒の感想にもそれがよく現れているが、正木直彦も次のような風流なエピソードを伝えている。

明治三十六年の事であつたと思ふ。美術學校で日光へ修學旅行

をした事がある。此の時、日本畫の方では川端玉章、荒木寛敏と云つた老大家の外に、寺崎廣業が付いて行つた。

さて、湯元の宿に泊つて、晩飯に一杯飲むと廣業は急に元氣が出て來た。見るとその家の唐紙が張替へたばかりで、上の小壁までずーつと白くなつてゐる。それを見てゐる中、勃然として畫心起り、

『一つ、やらうか！』

と云つて、學生に墨を磨らせると、廣い唐紙から小壁に續けて、それへ廣業が一氣に大きな山水を描いてしまつた。すると寛敏さんが秋の事だつたので紅葉を描き、玉章が水を描く——と云つた工合で見る間に偉いものが出來てしまつた。

ところが、それを見て吃驚したのは宿の女中で、周章で主人に注進した。主人も驚いて其場に現れ、

『折角張つたばかりの唐紙を、こんなに汚されてしまつて……困つたことになつた……』

と澁面つくつて苦情を云つた。それを見て廣業は、空呆けて、『いや、それは氣の毒な事をした。では、もう一度張替へさせて上げよう。……』

と云つて笑つてゐた。其時、宿の主人を廊下に連れ出して何か耳打をした者があつた。すると、間もなく、主人が最前さいぜんとは打つて變つて、袴まで穿いて現れ、座に現れて平謝りにあやまつたが、今度は番頭に、續々張りたての唐紙を運ばせて來て、『どうぞ、此處にも未だ張替へたばかりのがござりますから、よろしかつたら何なりとお描き下さるやう願ひ上げます。』

と云ひ出した。廣業は笑つて、

『いや、親爺、もう澤山だ。吾々が汚したのも、すぐ職人と呼んで張替へさせやうか?……』

と、からかつた。斯ういふ事にかけては、廣業は類の無い達者さを持つてゐた。その時の繪は、忽ち有名になり、その繪を見る爲にわざ／＼その宿を選ぶ、といふやうな人もあつたと聞いたが、惜しいことに火事で焼けてしまつたと云ふ。

(「寺崎広業」『回顧七十年』昭和十二年。学校美術協会出版部)

⑨ 美術祭

明治三十六年十一月三日の天長節にあたり、校友会は本校設立十年を記念して美術祭を挙行し、あわせて展覧会を開催した。これについては『東京美術学校校友会月報』第二卷第三号「美術祭之巻」(明治三十六年十二月)および『美術祭紀念帖』(同校友会編。同三十九年三月)に詳しい記録がある。それによるとこの美術祭は

上は神代より、下は明治の今の世に至るまで、澤を我邦の美術に遣したる先達鉅匠と、遠くは西洋諸國に在りて、我邦今代の美術に功績ありし大家名手の高風遺徳を追慕するの餘り、其流を酌む幾百の我會員等相謀りて一場に會し、其英靈を請して之を祀り、以て高德の存する所を仰ぎ、以て虔敬の衷を致し、又謹みて弔慰の赤誠を表するに在り。

という主旨のもとに挙行されたもので、わが国古来の風習であると

ころの先人の高風遺徳を称える祭奠や欧米の美術家の間で行なわれている美術祭などの例に倣つたのであるが、全校あげてこのような催しを行なつたことは、美術学校騒動以来の動揺が静まり、校内の空気が安定したことを象徴しているように見える。正木直彦は前年二月の『教育公報』に掲載された談話のなかで、「歐米にては美術家を出したる郷里にては其の美術家のために祭をなし頌徳の碑を立て以て其の郷里の飾ともなし榮譽となすの風は決して珍らしからず」と芸術上の偉人をたたえる風習を称賛しており、このことから見て正木自身も美術祭挙行には大いに賛成であつたと考えられる。天長節に開催したのは計画の決定が九月で、十月四日の設立記念日までに準備が間に合わなかつたためである。「第一回美術祭」と銘打つて開催したところを見ると、その後も逐次開催する予定だつたらしいが、実現せず、校友会の美術祭としてはこれが最初で最後だつた。

後々まで語り伝えられたこの空前絶後の美術祭は、今日の学園祭とは全く異なり、教師と生徒が一体となつてその準備や進行にあたり、ともに祝い楽しんだ。監事長高村光雲、幹事大沢三之助、羽田楨之進、石井吉次郎らのもとに教師と生徒が各種の役目を分担して祭りを盛り上げ、校内は三万人の来観者で賑わつた。左記は当日の催しものの概況である。

十一月三日

(一)美術祭式典 午前九時

祭壇(竹内久一、島田佳矣、関保之助らの考案による)を前に